

令和 3 年度 学校評価報告書（総表）

1 学校の概要			
学校名	筑波大学附属小学校	校長名	佐々木 昭弘
幼児・児童・生徒数（R4.3.1現在）	755	学級数	24
2 教育目標等			
① 学校教育目標	<ul style="list-style-type: none"> ○人間としての自覚を深めていく子ども ○文化を継承し創造し開発する子ども ○国民としての自覚をもつ子ども ○健康で活動力のある子ども 		
② 学校経営方針	<ul style="list-style-type: none"> ○全校職員の協力のもとに、全人教育を目指す。 ○グローバル人材育成のための先進的教育を目指す。 ○インクルーシブ教育システムにおける教育モデルの開発・実践に取り組む。 ○第 3 期中期計画に積極的に取り組み、小・中・高と大学との連携に基づく先導的研究（小・中・高一貫グローバルな素養を育てるカリキュラム開発）を行う。 ○本校の特色である小学校における「教科担任制」を充実させ、実験的・実証的に授業を展開し、「研究発表会」の開催、「教育研究」誌の刊行等を通して、これからの日本の小学校教育モデルをつくる。 ○スリム化したカリキュラム（40 分授業等）の編成、教科横断的な機能を高めた総合活動（STEM⁺）を取り入れたカリキュラム編成の研究に取り組む。 ○現職教育の拠点校をめざすと共に、海外に向けても積極的に教育実践の発信及び教育技術交流を行い、小学校教師教育の国際的拠点校をめざす。 ○新型コロナウイルスの感染予防対策を適切に取りながら、児童の学びの場を保障するための具体的な手立てを講じる。 		
③ 重点目標	<ul style="list-style-type: none"> ①全人教育を目指す 小学校では、教科内容を発展的に学ぶ態度を育成するとともに、運動や体験的な活動を重視し、知・徳・体の統合的な教育を推進する。 ②グローバル人材育成のための先進的教育を目指す 「STEM⁺」のカリキュラム編成を推進し、国際理解教育、英語教育、情報教育等の観点から、グローバル人材育成のための方向性を探る。また、セキュリティを高めたネット環境・ICT 環境をさらに整備し、積極的活用と研究を推進する。 ③インクルーシブ教育システムにおける教育モデルの開発に取り組む 附属 11 校で連携を図りながら、インクルーシブ交流の教育モデルの開発に協力する。 ④未来 10・20 年を見通した将来構想の構築と共有化を図る 小・中・高、さらには特別支援学校との連携を深めると共に、本校の存在意義を明確にするために、将来構想委員会を立ち上げ、将来構想の共有化を図る。 ⑤新しいカリキュラム編成をめざす 小学校における「教科担任制」の教育的な機能を高めると共に、カリキュラムのスリム化（40 分授業等）を図る。文部科学省の研究開発学校の指定を受け、これからの日本の小学校教育モデルをつくる。 ⑥ 教師教育の拠点をめざす 全国の小学校教育のモデルになるような試みを行う。「研究発表会」の開催、教育誌『教育研究』誌の発行、「各地研究会・研修会」への協力等を継続して行う。そのために、オンラインの活用にも力を入れる。教員免許状更新講習を、6 月、7 月、9 月に各 1 回、合計年 3 回開き、積極的に取り組む。小学校教職課程の設置に伴い、本校で教育実習の充実に努める。 ⑦ 国際教育協力の貢献をめざす 引き続き JICA や APEC への協力を積極的に行う。また、提携を結ぶデンマークや韓国との授業研究を継続するとともに、算数、理科だけでなく、幅広い教科教育との国際連携を目指した「授業技術交流会」も開催していく。 オリパラ教育プログラムの開発には継続して取り組む。 		

④ 前年度（令和2年度）
の成果と課題

①先導的教育拠点として〔重点目標 ①・②・⑤〕

令和元年度から「美意識を育てる」の研究に継続して取り組んでいる。教育における「美意識」を明らかにするとともに、それを育てるための授業のあり方についてその具体を探っているところである。

課題として浮き彫りになってきたのは、教科間の系統・連携指導の充実とバランスである。令和2年度から文部科学省の研究開発指定校として取り組んでいる「指導内容のスリム化、教科横断的な指導を含むSTEM⁺教育を取り入れた新しいカリキュラム創出」について、「美意識」の研究と関連づけながら進めていく。

研究の成果は、年2回の研究会（6月・2月）や教育誌『教育研究』等で、これまで通り発信していく。

②教師教育拠点として〔重点目標 ⑤・⑥〕

『美意識』を育てる」をテーマとした研究発表会を令和2年6月に予定していたが、コロナ禍のため8月に延期することとなった。初のオンライン開催となったが、全国に向けて発信することができた。（「研究紀要」No.76参照）

例年2月に2日間の日程で開催している初等教育研修会も1日開催となったが、各教科・領域ごとに今日的なテーマを設定し、オンラインによって全国各地の教員と意見交換が行われた。

月刊誌『教育研究』においても、各教科・道徳・英語・総合活動等の新しい教材開発、指導法の開発をし、提起し続けている。

これから教師を志す学生に対しても、筑波大学初等教育コースの学生や看護学類生への教育実習を通して指導を行っている。令和元年度から「教育実習修了証」を発行し、卒業後3年間は、本校の研究会へ無料で参加できるようにしている。

地域協力の一環として、東京都内の教育委員会が主催する研修会や、校内研究会への講師派遣を行っているが、令和2年度は新型コロナウイルスの感染拡大予防の観点から、その回数はかなり制限された。また、近隣校の教員の日常的授業参観受け入れや、日本国内からの研修の受け入れ等は実施できなかった。同様に、筑波大学の教員免許状更新講習も、その開催を見送ることにした。

今年度は、感染状況等を注視しながら適切に判断し、実施するための方法を模索していきたい。

③国際教育拠点として〔重点目標 ②・⑦〕

令和2年度は、海外への渡航も海外からの来日もほとんどできなかったため、国際的な交流を図ることができなかった。

これまで交流を続けてきたデンマークなどからは、授業研究会を希望する声は今も届いている。国内外の感染状況に応じて、意見交換する場の持ち方について考えていきたい。

④その他〔重点目標 ③・④〕

附属大塚特別支援学校と保谷教場での合同の芋掘り行事を継続して行うなど、特別支援学校との連携に関わっていたが、これもコロナ感染拡大の影響を受け、令和2年度は行うことができなかった。令和3年度については、協力校と連絡を取り合いながら、交流の方法を探していきたい。

休校中の学びを継続するために、「まなびポケット」や「Vimeo」を使った課題配信、ZOOMを使った双方向の意見交換など、オンライン学習の環境整備に取り組んできた。現在、セキュリティの強化、通信速度の向上に向けて、インターネット環境を整備しているところである。今後は、GIGAスクール構想による端末の活用法なども含めて、見通しをもって計画を進めていく必要がある。

附属小学校の今後のビジョンを明確にするために立ち上げた「将来構想委員会」を中心に、他附属との連携も含め、新たな附属小学校のあり方をこれからも考えていきたい。

3 重点目標達成についての総括的評価

令和3年度も新型コロナウイルスの感染拡大が続いたため、感染防止対策の見直しを繰り返しながら、通常通りの教育活動に近づけるための努力を続けた。時間割はできるだけ変更のないまま行い、授業時数を確保することができた。また、コロナの症状が軽い児童や、登校に不安がある児童に対しては、オンライン授業を行ったり、「まなびポケット」で授業内容を共有したりしながら、学びを進めることができた。行事に関しては、令和2年度には全て中止に終わった宿泊行事を、減泊しながらも実施したり、全校での運動会や集会行事を全校児童が参加した形で行ったりすることができた。また、GIGAスクール構想による一人一台端末も配付され、PCを活用した学習についても、新たな方法が模索されている。

一方では、人と人が直接会って交流を深める場が設定しにくくなったために、インクルーシブ交流や海外の教師や児童との交流の場をもつことができなかった。お互いの方見方や感じ方を交流させながら、それぞれのよさを取り入れていく場を、オンラインなども活用しながら増やしていけるよう工夫する必要があるようである。

校内研究のテーマ「『美意識』を育てる」と関連させながら、各教科・領域の指導内容や指導方法について見直しが図られている。この過程の中で見えてきたカリキュラムの柱を整理することによって、現行のカリキュラムは整理され、スリム化（40分授業等）につながるものと考えている。

また、「STEM⁺」の考えを取り入れた総合活動については、各学級の取り組みをお互いに紹介しながら、活動の幅を広げることができた。

これらの研究への取り組みや成果については、「研究発表会」（オンライン開催）や「教育研究」誌を通して、全国に発信している。さらに、全国各地から講師として招聘された際に、実践事例を交えながら提案し、そこでいただいた意見もその後の研究に生かしている。

附属小中高の未来を見通した将来構想については、それぞれの学校との情報交換を進めたり、研究者の話を伺ったりしながら、少しずつではあるが前進している。

4 令和4年度の学校課題

令和3年度の活動を通して見えてきた新型コロナウイルスの感染防止策を徹底させながら、授業や諸行事を、できるだけ通常に近い形に戻していく必要がある。さらに、コロナ禍の中で生まれてきたオンラインを活用した情報交換、情報共有の方法を活かした学習の進め方についても、より充実させていきたいと考えている。

また、本校の使命を再確認し、先導的教育拠点校としての役割を十分に果たせるように、他の附属との連携を深めながら、将来の教育のあり方を見据えた研究を継続していかなければならない。そこで得た知見を、日本のみならず諸外国に向けても発信していけるように、その方法も含めて、構築していくことが求められる。

本校の教育研究のシステムは、それぞれの教科の独自性の共生・共創によって保たれてきたと言える。しかし、独自性が高いがゆえに、教科横断的な指導カリキュラムの構築が難しい現状になっていたことは否めない。現在、総合活動では、「STEM⁺」の発想を生かした活動を多く取り入れ、教科横断的な指導法の研究に取り組んでいる。このような新しい視点を取り入れることが、新しい総合的なカリキュラム編成へとつながるはずである。このことを実践研究を通して明らかにしていかなければならない。

また、コロナの感染状況を見ながら、インクルーシブの視点からの活動や海外との交流も再開する必要がある。

5 学校課題に向けての具体的な取り組み

各行事について、その目的を見直すとともに、新たな可能性を探っていく。また、日々行われる授業については、各教科の意義を見直し、その質をさらに高めていくことは、当然のこととして継続していく。そこで得た知見を、校内研究のテーマ「『美意識』を育てる」につなげていく。

また、「STEM⁺」の具体について、様々な活動に試行的に取り組んでいく。

国際交流に関しては、提携を結んでいるデンマークのみならず、イギリスでの授業研究会の計画も進んでいる。また、アゼルバイジャンやオーストラリアの学校との交流を進める計画もある。諸外国の授業の様子を参観したり、カリキュラム等の実情について情報を交換したりすることは、日本の教育を考える上でも参考になる。オンライン開催の可能性も含めて、今後も継続していきたいと考えている。

また、GIGAスクール構想に伴うICT環境の整備にも取り組み、教育活動をより充実させていくことが求められる。

6 成果物一覧（出版物・紀要・書籍等）

- 『研究紀要』第77集（著：筑波大学附属小学校・一般社団法人初等教育研究会）
- 『教育研究』令和3年5月号～令和4年4月号（編集：筑波大学附属小学校・一般社団法人初等教育研究会）
- 2021年度『初等教育研修会』要項（著：筑波大学附属小学校・一般社団法人初等教育研究会）
- 『子どもに委ねる算数授業』（著：大野桂）東洋館出版社
- 『保健委員アイデアブック』（監修：齋藤久美）あかね書房
- 『個別最適な学びに生きる フレームリーディングの国語授業』（著：青木伸生）東洋館出版社
- 『「学びがい」のある学級—子どもの声を引き出す教師の言葉がけ』（著：白坂洋一）東洋館出版社
- 『教科教育に特別支援教育の視点を取り入れる 授業のユニバーサルデザイン Vol.13』（編著：桂聖）東洋館出版
- 『考え、議論する道徳に変える導入・終末＆評価の鉄則31』（著：加藤宣行）明治図書
- 『道徳授業を変えたい!と思ったときに、まず読む本—「本質」から始めるKTO入門』（著：加藤宣行）東洋館出版社
- 『系統・関連指導を重視した小学校理科の新カリキュラム・デザイン』（著：佐々木昭弘）明治図書等

学校評価（自己評価）報告書（項目別表）

令和 3 年度

学校名

筑波大学附属小学校

項番	評価項目	具体的評価結果
1-1-1	説明、板書、発問など、各教員の授業の実施方法	<p>本校では、月 1 回の校内研究会において授業研究会が行われる。研究協議会では、専門教科の垣根を越えて厳しい議論が繰り返される。また、学年部内などでお互いの授業を公開し合い、授業づくりの方法について自主的に勉強会を開いている。その中で、教師の指示・説明・発問、板書力といった教育技術についてより高いものを求めている。</p> <p>各教科の特性、教師の個性を尊重し、仮説検証型の研究スタイルにこだわらない多様な研究手法を導入することで、各教科・各教師の独自性を生かした研究が進められている。</p>
1-1-3	体験的な学習や問題解決的な学習、児童生徒の興味・関心を生かした自主的・自発的な学習の状況	<p>「主体的・対話的で深い学び」の実現のために、導入部分での児童の問題意識を高める指導を重視した授業づくりを大切にしてきた。また、教材開発はもちろん、学習形態の工夫、ICT 機器の有効な活用により、協働的な学びの実現を図ることができた。</p> <p>コロナ禍であっても、感染防止対策を取りながら、実際に体験したり、お互いの意見を交流させ、合意形成を図ったりする場を積極的に取り入れるようにした。</p> <p>本校では教科担任制をとっているが、それぞれの専門分野を超えた議論が校内研究会などの研修を通して、児童の興味・関心を高めた自主的・自発的な学習を実現することができた。</p>
1-2-2	児童生徒の学力・体力の状況を把握し、それを踏まえた取組の状況	<p>ほぼ通常通りの時程で学校生活を行ってきたため、授業時数の確保は十分にできた。様々な理由で欠席している児童に対しては、オンライン授業で可能な限り参加してもらったり、「まなびポケット」で課題や板書の共有をしたりしながら、学力差が広がらないように配慮した。</p> <p>学力については、通常の年度と変わらないと感じている。</p> <p>体力面では、林間合宿での登山の体力が心配されたが、どのクラスも学年で目標とする山に登山することができた。また、6年生の海での水泳についても、日帰りではあったが、かなりの距離を続けて泳ぐ泳力がついてきたことを確認できた。</p>
3-1-2	問題行動への対処の状況	<p>各学級で生じた児童の問題行動については、当該学級の学年部やその学級の専科教員、管理職と、小さな変化であっても情報共有をしながら指導に当たるように心がけている。場合によっては、朝のミーティングを開いたり、定期的な会議を開いたりしている。早い段階で専門家（スクールカウンセラー等）と情報を共有し、保護者と連絡を密に取り合いながら解決に向けて取り組んでいる。</p> <p>また、児童指導会議を職員会議の後に設定し、月 2 回定例化して開催している。多くの教師間で情報を共有することで、組織的に問題を解決できるようにしている。状況によっては、附属学校教育局の協力を仰ぎながら指導に当たってきた。</p>

3-2-1	自ら考え、自主的・自律的に行動でき、自らの言動に責任を負うことができるような指導の状況	<p>コロナ禍のために、多くの行事が通常通りに実施できなくなった。その中で、子どもたちが自主的な取り組みを見せた。</p> <p>例えば、集会行事では、運動場を利用して、全校が一堂に会する場を設けた。また、映像と演技を組み合わせた新しい学習発表の仕方を考え出した。また、運動会では新しい種目の練習に自主的に取り組んだ。</p> <p>毎日の学校活動の中で、換気をするとか消毒を徹底する等、感染を防ぐための取り組みについて、個々が考えながら継続していた。</p> <p>通常通りに実施できないことがたくさんある中で、自分たちに何ができるかを考え、課題を一つずつ乗り越えていけるよう、助言を心がけた。</p>
4-1-3	法定の学校保健計画の作成・実施の状況、学校環境衛生の管理状況	<p>保健主事の養護教諭と保健担当の主幹教諭が中心となり、毎月行われる保健部会において計画の遂行状況を確認し、児童への指導、担当各教諭への連絡を随時行った。</p> <p>新型コロナウイルス問題では、学校医の指導を受けながら感染防止計画を立案し、全職員の協力のもと感染防止の準備を進め、実行することができた。</p>
6-1-1	特別支援学校や特別支援学級と通常の学級の児童生徒との交流及び共同学習の状況	<p>コロナの感染拡大の影響により、長年継続している大塚特別支援学校との農園での交流活動は実施できなかったが、12月の共生シンポジウムをきっかけに、新たな交流の仕方を試みた。</p> <p>三浦海岸合宿も行われなかったため、貴重な経験をするのができなかったのは、非常に残念なことである。</p>
11-1-1	学校運営へのPTA（保護者）、地域住民の参画及び協力の状況	<p>若桐会、後援会における学校への支援活動は、他に類を見ない強力な体制である。</p> <p>若桐祭は、コロナ禍のために通常通りには行えなかったが、役員をはじめ保護者の方々の知恵と努力によって、午前と午後を入れ替えた二部制によるハイブリッド開催ができた。これによって、前年度は断念した対面での交流が実現した。</p> <p>このような積極的なサポートによって、児童の学校生活は大変充実したものになっている。</p> <p>また学校評議委員会では、地域の方、本校のOB、大学など有識者などに関わっていただき、多様な視点からのアドバイスをいただくことができた。</p>
14-1-2	大学との連携・協力	<p>四校研では、小学校、中学校、高校、大学の各教科専門家で集い、グローバルな素養が育つカリキュラム編成と実際の授業のあり方について議論し、報告書にまとめることができた。</p> <p>また、本校の研究発表会（6月）においては、教科・領域によっては、分科会指導助言者として筑波大学の先生方に参加していただき助言を受けた。</p> <p>初等教育コースの授業や教育実習については、通常通り、対面で実施することができた。</p>
14-1-3	先導的教育研究	<p>毎月1回の校内研究会では、研究授業や講演会を行った。研究テーマ「『美意識』を育てる」に基づき、その具体的な指導方法についての研究授業を繰り返しながら、研究の成果や課題を明らかにすることができた。そこで得た知見を研究紀要にまとめ、6月の研究発表会で発表した。</p> <p>また、月刊誌『教育研究』等で広く教育現場に提案することができた。</p> <p>さらに、文部科学省の指定も受け、カリキュラム研究にも取り組んでいる。また、総合活動では、「STEM+」の視点を取り入れた活動についても実践を積み重ねているところである。</p>

14-1-4	教員養成・教師教育	<p>前年度は中止になった教員免許更新講習を、令和3年度は、オンラインではあったが年に3回実施することができた。本校で行う講習は、教師と児童による実際の授業を参観することができ、その事実をもとに研修を深めることができると好評である。</p> <p>「研究発表会」は6月に、「初等教育研修会」は2月に、オンラインにて開催することができた。全国から多くの先生方が参加され、様々なご意見や感想をいただくことができた。今後の研究に生かしていきたい。</p> <p>各都道府県教育委員会等から講師派遣依頼があったのだが、コロナの影響により、その多くをオンライン開催に変更せざるを得なかった。オンラインによる研究会も回を重ねるごとに要領を得てきて、動画などを共有しながら、新しい形の情報発信の方法を模索しているところである。</p> <p>教員養成については、大学の初等教育学コースの授業において、本校の教員が学生の指導に当たっている。また、教育実習の受け入れも行っている。</p>
14-1-5	国際交流・国際貢献	<p>4年生の希望者を対象とした「日米児童交流会」は、コロナの影響により、実施できなかった。</p> <p>筑波大学留学生との交流会は、5、6年生でクラスごとに対面で実施することができた。エルサルバドル、モロッコなど、交流をするまであまりなじみがなかった国についても、関心をもつことができた。</p> <p>「北欧授業研究会」については、相手側から開催希望の打診はあったが、コロナの状況が好転しなかったために、実施は見合わせることにした。状況が許せば、引き続き交流を深めていきたいと考えている。</p>